

園長通信

(令和7年度6月号)

幼稚園型認定こども園高槻双葉幼稚園
園長 岡部 祐輝

【活動がもたらす可能性】

今年の5月は、晴天続きではなく、「雨が多いな」という印象がありました。そのような中でも予定通り、年長、年中の子どもたちの遠足が実施でき、ほっとしているところです。

さて、先日、日本の保育の研究に関する学会の中でも大規模で行われている、「日本保育学会」がありました。学会で私や職員、それぞれに発表も行わせていただき、これから保育を進めていく中で、ありがたい示唆をたくさんいただく時間となりました。

その学会の基調講演の中のお話で、「芋掘りをする」活動の話がありました。多くの幼稚園では、「栽培をする経験、収穫する経験」を園内や園外で行っているかと思います。こちらをお読みいただいている皆様の中にも幼少期、そのような経験をされた方もいると思いますが、この活動はおおむね、以下のことが多いのではないのでしょうか。

◎芋の苗を観察する

◎植え方の説明を先生から受ける

◎芋の生長を観察する

◎芋の収穫をし、絵を描く

これまで通信で書かせていただいたことありますが、小学校の教科教育とは違い、この「芋の苗を植える経験、収穫する経験」は、生活科や理科のように、何か知識、技能をつけることを目的として、何かを習得したりするものではありません。よって、活動から子どもたちの興味関心が広がり、様々なアイデアを広げていくことができる、自由度の高い活動ともいえます。

講演の中で取り上げられた事例は、「芋のつるや、根っこに注目をした子どもたちが、そこから自分の描いたイメージの世界とつなげて、広げていく」ものでした。その結果、芋のつるやねっこを、単に描き写すだけではなく、細長い紙につるや、ねっこからイメージした世界（例えば宇宙など）と合わせて描くなどの活動に発展したという事例でした。

ここで講演の中で問いとして投げられたことは、

『芋掘りでは、芋を掘ることだけが大切なのか』



というものでした。

私たち保育者（教師/大人）は、「芋を掘る」ことに目が向きやすいですが、子どもたちはもしかすると、「芋を掘る」ことだけではなく、「ねっこや、つるを見ている」かもしれないという投げかけもありました。

これまでの教育観では、

「この活動からは、こういったことを経験させないと」

「このことは（興味があろうがなかろうが）みんなに一律教えないと」

という、「保育者（教師）が考えたねらいや、ねがいに基づく活動を子どもに提供する」という動きがありました。その教育観から、今の教育観では、

「自らが進んで問いを持つ」

「持った問いを自分で試行錯誤し、探究/探求し、進んでいく」

「仲間とともに相互に学び合う」

「子どもの興味関心を出発点にその興味関心がより深まり、広がるような環境や活動を検討する」

「学び方や学ぶ進度は個別に異なるので、個別最適な方法で展開していく」

などのことが主流の教育観となってきました。つまり、言い方を変えると、**「活動の見通しは、時として大きく変化していく」**とも言えます。

「芋掘りで何を教えるのか」ということから、「芋掘りを通して何を学ぶか/何ができるか/何が面白いと子どもは思うのか」という思考で、子ども理解のまなざしを向けると、おそらく活動の展開も大きく変化すると考えます。（これをコンテンツベースから、コンピテンシーベースに考えていくという言葉で表すこともあります）

当園でもこのように、保育者が立てたねらい/計画通りに単に保育を進めようとするのではなく、子どもの反応や様子を見取り、適宜方法や環境を変化させていくことを重視し、保育者が計画を考えるだけではなく、子どもの様子から柔軟に変更し、振り返りまでのプロセスを丁寧に考えています。時にこの子どもの興味関心が広がると、長期にわたる「プロジェクト」として、続いていくこともあります。

幼児期は、小学校以降のどの学校種よりも、子どもたちが自分の興味関心を探究できる時間を取ることができる校種でもあります。自分たちが「なんでだろう」、「どうなるか気になる」、「～を試して

みたい」ということを自分なりに追い求め、形にする経験が、小学校以降にもつながる重要な資質能力の一つである、「**学びに向かう力 人間性**」の育みにつながります。

この子どもの興味関心を出発点に。。。という議論では、「それは好き気ままにやることと何が違うのか？」という疑問を持たれる方も出てきます。

しかし、「学びのタネを自らの意志や力で進めようとしていること」、「集団の中で調整したり配慮をしたりしながらも取り組もうとすること」、そして、「自分自身で目的や考え、こうありたいということが明確にある」ことがある活動は、子どもの気ままではなく、子どもが主体的に遊び学んでいる活動と言えます。小学校以降がこれから重視していくキーワードの一つとして、「自己調整」という言葉がありますがまさにその部分につながる経験であるといわれています。私たち大人がすべて解決をするのではなく、解決する術をともに寄り添い考えること、ネガティブな思いを受け止めてくれる大人がそばにいてくれることなどを感じられることで、「乗り越えようとする力」も育っていきます。

私たち大人の予想を時に大きく超え、当初見通していたことと大きく異なることもあるかもしれませんが、保育者は、活動やその行動にねらいや意味、意義を検討しながら、かかわっていきたいと考えています。6月に入り、少しずつ新しいクラスにも慣れてきた子どもたち。「自分の好き」、「自分の一押し」が、どんどんと深まるこれからの時期がとても楽しみです。

